66

中国における奇穴の伝承

木場由衣登
日本鍼灸研究会

奇穴といえば，十四経に属さない「特効穴」と認識され，鍼灸臨床にも頻繁に用いられる穴もあるが，無数にあるこれら奇穴がどの様な経緯で成立したのかは，あまり知られていない．奇穴の成立過程を明らかにする一環として，今回は，中国資料を中心に調査したい．

この「奇穴」という名称の初出は明代の『奇効良方』（1471年）巻五十五にある「奇穴」の篇が端緒であり，ここには27種の奇穴（内迎香，鼻準，耳尖，聚泉，左金津・右玉液，海泉，魚腰，太陽，大骨空，中魁，八邪，八風，十宣，五虎，握拳，肘尖，肩柱骨，二白，独陰，内踝尖，外踝尖，嚢底，鬼眼，髖骨，四縫，中泉，四開）が記載される．『奇効良方』の奇穴は，『竇太師鍼経』（15種が同）と『鍼灸玉龍歌』（9種が同）が部分的に一致する．『竇太師鍼経』（『現代珍稀針灸三種』（黄龍祥・他整理，人民衛生出版社，2007年）所収）には，236種の経穴の説明（取穴法，主治病証，刺入深度，施灸数等）が記載され，この内31種（内迎香，印堂，太陽，子宮，関門，海底，魚腰，腋縫，蘭門，胛縫，龍囟，小骨空，大骨空，中魁，風市，髖骨，血郄，膝眼，上都，中都，二白，肘尖，手鬼眼，足鬼眼，十宣，海泉，金津，玉液，廖兪，四花，天応）が奇穴に相当する．小林健二著「古典文献からの奇穴の整理と臨床」（「医道の日本」2016年7月号特集・奇穴の研究と臨床）によると「『奇効良方』でいう奇穴の奇の意味は，書名の「奇効」そのものであり，思いがけない効果，不思議な効果がある穴をまとめた」とあり，小林氏が述べる様に董宿の「1穴ではなく，複数の組み合わせで治療効果を出す」という意図を尊重した方が理解しやすい．

『奇効良方』の奇穴は後世にも影響力があり，『鍼灸大成』（1601年）・経外奇穴に引用され，9種（四開，小骨空，印堂，子宮，龍玄，蘭門，百虫窠，睛中）が増補される．『鍼灸大成』は清・李守先『絵図鍼灸易学』に経外奇穴としてそのまま引用される．明・李梴『医学入門』巻一・治病奇穴には，9種（膏肓，患門，崔氏四花，経門四花，騎竹馬，精宮，鬼眼，痞根，肘尖，鬼哭）の奇穴と，7病証に対する無名穴が記載される．他にも『医経会元』などがこの構成の奇穴を伝え，『類経図翼』（1624年）巻10・奇兪類集になると31種の奇穴を記載する．しかし，『類経図翼』に記載される引用書名は，『千金』と『千金翼』が主であり，後は『神農鍼経』（『神農経』）と『玉龍賦』が少しあるだけである．『東医宝鑑』（1613年）鍼灸篇にも「奇穴」の記載があり，取膏肓兪穴法，取患門穴法，取四花穴法，騎竹馬灸法を含む．この後に「別穴」として，40種の奇穴の記載がある．清・廖潤鴻『勉学堂鍼灸集成』に記載される「奇穴」と「別穴」もこれと同じである．

中華民国時代になっても，承淡安『中国鍼灸学講義』（1941年）の「経外奇穴摘穴」には20種（患門，四花穴・附崔知悌四花穴法，騎竹馬灸法，腰眼，太陽，海泉，左金津・右玉液，機関，百労・附灸瘰癧法，肘尖，通関，直骨，夾脊，精宮，足太陰・太陽，鶴頂，足小趾尖，中魁，大・小骨空，痞根）あり，羅兆琚『鍼灸便覧表』（1933–1937年頃）の経外奇穴表には43種（『鍼灸大成』の35種と承淡安から8穴を補う），中国衛生部中医研究院編纂『針灸学簡編』（1957年）も21種と数はそれ程多くはない．しかし，陸瘦燕『針灸腧穴図譜』（385種，1961年），上海中医学院編『針灸学』（199種，1974年），郝金凱『針灸経外奇穴図譜』（588種，1963年）から急激に増加し，郝金凱の『続集』（1974年）では，耳穴，手掌と足底の穴を加えて1007種も記載するが，これは新穴を加えた異例である．『腧穴学』（楊甲三主編・副主編曹一鳴，1984年）は67種のみを記載する．WHOでは48種の奇穴（標準化経外穴）を決定しており，『中国針灸穴位通鑑』には182種の未標準化経外穴が収録されているが，これらも古典的な奇穴が多い．日本の大正から昭和期は，中医学が流入する以前の江戸期の古典的な奇穴が主流であるので，次回は日本の奇穴についても言及したい．